

2022年 第2回国際声楽コンクール東京・本選総評

審査委員長： 川上洋司先生（東京藝術大学名誉教授）

本選表彰式と審査員による個人講評会の前に、各日の受験者全員に向けた総評を審査委員長が語りました。ユーモアを交えながら、ときに辛口、ときに敬意と礼賛を惜しまない川上先生の肉声を御紹介します。受験生に留まらず、歌を学ぶ全ての人々への貴重なメッセージです。是非、勉強の参考にしてください。（コンクール事務局）

(01) グランプリ部門

この部門は国際声楽コンクール東京におきまして、一番の根幹を成す部門です。私たち審査員が何を期待して審査しているかといえば、歌ってくださる方が即、舞台人として、プロとして活躍できる人かどうか、ということのみているのです。だから表情、手のちょっとした使い方、その人がどれだけ一曲の中で、その曲を自分の血となり肉となりとしているか。そのためには、そのアリア一曲だけをやればいいという事では無いのです。全曲を捉えて、自分は作品の中でどんなキャラクターを演じなければならないかという事を、しっかり把握したうえで歌う必要があります。

歌曲もそうです。この作品はどんな作品なのか、ちゃんとテキストを理解して歌わなければ、きちんとした歌はできません。そこまでちゃんと勉強しているかどうか。これを審査の基準の一つとして考えている訳です。

新進声楽家部門の方たちにも申し上げたのですが、それらを全部含めてteatrale であること、演劇性と訳しますが、舞台の上で本当にこの人が、リゴレットならリゴレットのキャラクターを、アリア一曲の中でしっかりとさせるのが大切なのです、プロの歌い手としては。そこまで勉強しているかどうかということで、今日は採点しました。大きな声を出せばいい、という事ではないのです。それをまず皆さんに、発表前に承知して頂きたいと思います。今日、残念ながら5位までに入れなかった方は、やはりそういう勉強が足りないのだと思ってください。

そしてできれば語学を一つ、自分のものにして頂きたい。今日はカフェトーク賞を御提供頂いた代表もお越しになっています。あとで表彰して頂きますが、1位はなんと一年間の語学研修ができます。語学が必要だという趣旨を汲んで頂いて、賞をだして下さっているのです。1年間しっかり、みっちり勉強したら相当できるようになるはずですよ。真剣度の問題だと思うのです。語学を身に着けてしっかりと楽譜を、原語で理解して、作曲者はどういう意志をもって作曲したのか、ドラマツルギーを読み取る。プロとして歌い手になりたいのであれば、しっかりと勉強して頂きたいと思います。

(02) 歌曲部門

もちろん本選に残っている方々なのでしっかりした声を持っていることは確かなのですが、特に歌曲に必要なものは、詩に対する研究をどれくらいしているかという事だと思うのです。それと発音です。日本語もドイツ語、イタリア語フランス語も、言葉の意味合い、詩のもつ韻律、リズムを理解しているかどうか。そして必要条件である声の技術を持っているか。非常に立派な演奏をなさった方もいらっしゃいますが、やはり入賞されなかった方は、やはりまだまだ、御自分が、技術とテキストに対する理解力、それを表現する技術が足りないと思って頂いたら良いと思います。歌曲を歌うことは、非常に感性と、あたま、がいります。そのところをよく理解して、もっともっと、自分の歌曲とはどういうものか、自分の歌が、表現力がどういうものかという事をもう一度しっかりと把握しなおす、ということすることが大切ではないかと思います。

(03) ミュージカル部門

皆さまお疲れ様でした。（59人118曲審査して）私もツカレマシタ（笑）。本日は西日本准本選と東日本准本選から、ミュージカル御専門の二人の審査副委員長の先生がいらしていますので、お二人に講評をお願いしたいと思います。まず東日本御担当の信太先生お願いいたします。

■東日本准本選担当副委員長：信太美奈先生

今日の一言目は「わたしたちツカレマシタ！」（笑）。一生懸命聞いておりました。とても楽しかったのですけれども、毎回毎回（休憩ごとに）階段を昇り降りして、コーヒーやお菓子を頂きながら「わたしたちよくやっているよねえ」と内心呟いておりました。

皆さん、いろいろな曲をそれぞれが、何カ月も練習して今日に至ったと思います。ここに来るだけで皆さんは、相当狭き門を突破してきた方々ですので、順位に関わらず、自分に自信をもって、アドバイスされたことは真摯に受け止めて、これから自分のやりたい道に向かっていくために研鑽を重ねていてもらいたいと思います。

毎回、楽屋にもどるたびに、ほとんどの先生が思っていたことは「なんであんなにガナる（怒鳴る）のだろう？」という事です。皆さん、ミュージカルって地声でガンと怒鳴るだけでなく、ちゃんと、正しいポジションで歌わないと、喉を悪くします。今日はもしかしたら一回だけだからいいけれども、オペラと違ってミュージカルは上演期間が長いので、しっかり体の使い方を覚えていかないと、あっという間に喉を悪くしてしまうので、本当に体の使い方を学んでください。わたしは足の裏から頭のてっぺんまでちゃんと使えと言っているのですが、私のコメント欄には「しっかり体を使い、下半身を使い」と、そればかり書いていますので、皆さんしっかり学んでください。

それから心ですね。ハートと体が両方、ちゃんと声にできるように、また来年お目にかかることを楽しみにしております。来年、成長した姿が拝見できることを・・・キ・タ・イ・しております！

■西日本准本選担当副委員長：楓八州子先生

お疲れ様でした。えー、私はまだあと30人くらい聞かせて頂ける力残っているのですが・・・（笑）。疲れたというよりも、勉強させて頂いているのは私だなあとと思いながら聞いていました。とても楽しかったです。お一人お一人のパフォーマンスや歌声。何年か聞かせて頂いている顔なじみの方々もいらっしゃいます。調子を落とした方もいらっしゃるし、クオリティがぐんと上がってトライしている方もいらして、1年の楽しみであります。

やはり基礎の力というものが大切です。喉もそうですが、今後、みなさんプロを目指しているかと思いますが、やはり最後に残るのは基礎の力だと思います。環境などによって演技できる方はたくさんいらっしゃるのですが、やはり声の正しき出し方とか、楽譜をちゃんと読めるとか、そういうことがきちんとできていないと、長く続いていかないとおもいます。本物の、本当のアーティストになって頂きたいと、心から願っております。勉強して、積んで積んで、また来年も来てください。

それから、本番に向けて、私どもの生徒にもちょっと喉を壊している子もいたのですが、すごく練習される方が多いのですね。「5・4・3・2・1」って教えています。何日前からもう、一日5回しか歌わない。次は4回、次の日は3回、2回、前日は1回しか歌わない。反対に、何回も歌って声が出るようになる方もいらっしゃると思いますが、やはりそこが計算できて、本番に一番良い状況を出せるのが、プロにとっては一番大切だと私は思っております。来年また楽しみにしております。ありがとうございました。

(04)新進声楽家部門

新進声楽家ということで、このコンクールの根幹を成す部門の一つです。皆さんがこれから声楽家として、プロとしてたっていくということを前提に、私たちは審査いたしました。私自身の審査の仕方は「声はもちろん、歌の内容はもちろん」、そしてその人の歌がteatraleであるかという事。「演劇性」と日本語では訳すかもしれませんが。舞台の上に立ってこの人が歌い手としてだけではなく役者として、総合的な役者として、これからどのように成長していく素材であるかな、ということを頭にいれて審査をさせて頂きました。それを踏まえて総評したいと思います。

まず皆さんが、素材として非常に良い声を持っているということは明らかです。ただそれを、御両親から頂いたその声を、どのように使って表現しているのか、ということで順位がついたと思います。素材を生かし切れていない人が今回も非常に多かった。それはあなた達の「歌い手としての意識」がどうか、という事に基づいているものではないかと思います。やはり「でかい声を出す」ということに主眼を置いているひとがいかに多いか。声の大きさは、それぞれ持って生まれたものもあるかも知れません。ひとつの武器にはなりますが、十分条件ではないという事です。その事を私はこの10年以上ずっと申し上げてきました。叫んで済むならば、それは非常にプリミティブな事です。

では何が必要なのか。

思い起こしてほしいのはベルカントの起源です。400年以上前、日本が関ヶ原の戦いでドンパチをしているときに、フィレンツェで産声をあげたのがモノディー様式です。音楽史で勉強しましたね。カメラータ・フィオレンティーナ*。バルディ家というところに、ジュリオ・カッチーニとかガリレオ・ガリレイのお父さんなどが集まりました（モンテヴェルディもモノディー様式です）。なにを目的にしたかと言えば「言葉がしっかりと聞こえるように」ということです。いろいろな意見もありますが、モデルにしたのはギリシャの古典劇とされています。体を使ってしっかりとdeclamazione(デクラマシオン。朗誦法)をして、声がきちんと響き、そして言葉がきちんと伝わる。

それを目的として、まずカッチーニがLe Nuove Musiche（『新しい音楽』）という曲集を出した。その最初の曲がAmarilli mia bella という、あまりにも有名な曲ですね……。誰か洒落を言っていました？つい乗ってしまいますね（笑）。どこまで話しましたっけ……。で、そこで生まれたrecitar cantando という考え方を発展させてbel canto という概念が生まれたわけです。それがずっと、400年以上かけて今日まで生きています。

言葉を珠玉のメロディに乗せる。特にヴェルディのトラヴィアータは、とにかく音型で心の動きを全て表現する。トラヴィアータまでの曲というものは、その音型をしっかりと技術的に歌えるようにならないと再現することができない。技術的なものが絶対に要求されている訳です。今日は何人かバロックオペラ、前期ロマン派のオペラを歌われた方がいますが、僕の印象としては、技術的にしっかりと歌われたひとは、残念ながらいなかった。やはり、世界に出ていく歌い手をこれから目指すのであれば、発声技術というものをもう一回見直して頂きたい。言葉を生かすにはどうしたら良いのか。

それから大切なのは、オペラ歌手として舞台に立ちたいならば、今歌っているその一曲だけをさらえば良い、という事ではないですね。オペラのアリアを歌う。このアリアが全曲の中のどういうシチュエーションで歌われるのか、全体の役割、全体を把握していないと本当の意味で歌えたことにならない。語学の勉強。台本を原語で読める事。そこまで力をつけていかないと。イタリアの有名な歌い手でデジレー・ラカントーレという人がおりますが、この人は6か国語を平気で話します。スペイン行ったらスペイン語、ドイツに行けばドイツ語、フランスならフランス語。監督とも対話ができるシマスコミのインタビューに応じることもできる。日本にきても日本語は話しません……。そういった歌い手に伍していくには我々も語学の基礎を築かなければ駄目という事です。目指すものはもっと大きなもの。コンクールのために、ただ、pezzo（ピース）を一曲だけ用意すれば良いという感覚で受けていると、これから先、伸びていけないという事です。貴方がたがプロを目指しているということを前提に申し上げているので、厳しい意見かもしれませんが、頭のどこかに留めて、これから先、頑張ってくださいと思います。

*【編集注：カメラータ・フィオレンティーナ】

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%A1%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%82%BF>

(05)大学生部門

大学生部門に出場された貴方がたは、これから先、プロの歌い手になりたいと思っている方がほとんどだろうと思います。1年生から4年生までいらしていると思いますが、その中で、プロを目指す方のための総評ということで、少し辛口になるかもしれませんが、しっかりと聞いてお帰りになってほしいと思います。

毎年言っている事なのですが、本選まで残ってくる方々は、持ち声の良さ、クオリティの良さというものは皆さん、お持ちなんです。ただそれをどのように自分の体に、petto(胸、胸郭共鳴域)に納めて、伸ばしていくかという作業は、この大学の4年間でしっかり学ばないと、その後ではなかなか勉強できません。それを考えてまず技術的なこと。まだまだ声のクオリティに頼って、大声大会になっている人が多いですね。

そして、気になったのは特にベルカントの時代、バロックから前期ロマン派くらいまでの時代、ヴェルディくらいまでの時代を歌った方は、技術をきちんと身に付けていないことが多いために、まず、音程の悪い方が多かった。音程が悪いということは、これも毎年申し上げていますが、耳が先天的に悪くない限りは、絶対に発声なんです。発声技術が足りないから音程が悪くなったり、声が破綻をきたしたりするのです。いま言ったことを、私のことではないかと思った方、いっぱいいると思うのです。ぜひそれを、4年で卒業するまでに直して頂きたい。非常に努力がいらいます。ただ今のうちにしっかり直しておかなければいけないことだと思います。

それから二つ目。歌曲を歌われた方、なかにはしっかりテキストを読み込んで自分のものにして歌っていた方がいましたが、ほとんどの方・・・酷い方になると、アリアを歌う前の声慣らしのような感じで歌っている方もいました。日本歌曲もイタリア・ドイツ・ロシア歌曲にしても、それぞれテキストがあり、作曲家が命を削って、そのテキストに曲をつけた訳ですよ。ですから、まず作曲家への、詩人への礼儀として、しっかりテキストは表現する、という意識をもたなければ、いまからしっかりそれを勉強しなければなりません。語学も含めて。プロとして立っていくことはできません。本当に厳しい世界ですから、そこは肝に銘じてほしいと思います。オペラのアリア一曲歌うにしても、そのアリアが全曲のうち、どういうシチュエーションで歌われているかということを、全く考えずに歌っている方も多かったです。これはダメですよ、本当に。それはアマチュアで終わる事です。

大学4年間のうちにどれか一か国は、歌に必要な言葉をマスターしてほしい。そして自分が得意とする国のオペラは、やはり原語でリブレット、台本をちゃんと読める語学力を身に着けてほしい。これを今やっておけば、出てから非常に楽なんです。

御存じのように日本の、プロとして、演奏家として立っていくシェアは本当に狭いのです。ですから、歌っていきたいと思ったら実をつけて、海外に出て行って勝負する他はない。そのためには我々、東洋人というものは、たくさん武器をもっていなければ勝負になりません。そういう厳しい世界です。この世界には「公平」ということはあり得ません。「不公平」なんです。実力のあるものだけが勝っていきます。それを肝に銘じて欲しい。

まだまだあなた達は勉強が足りません。これからしっかり勉強して欲しいと思います。次に聞かせて頂くときには、「わあ、この人こんなに素晴らしい歌い手になった!」という風に、僕たちを良い意味で驚かせて欲しいのです。期待しています。頑張ってください。

(06)高校3年/卒業生部門

受験された方は、おそらく音楽大学や一般大学の音楽教育などを目指しているだろうと思うので、私たちも「将来、歌手を目指す人たち」なのだという感覚で採点しました。ひと頃よりも今年は、大曲を歌う方が少なくなってきたのですが、まだ、自分のいまの技術以上の曲を歌おうとして、技術的にうまくいかないという方がいました。一番気になるのは発声です。今年は欠点が3つのグループに、顕著に分かれました。1つは、体が使えなくて声がschiacciare(押しつぶす/イタリア語)する事。高音にいくとき、五線の上のミ・ファ・ソあたりを上手く超えて頭声部に入るバッサッジョという技術が無いままに行ってしまうので、音程が低くなる。低音域は逆に、音がvuoto(空虚)になってしまう、響きが少なくなってしまうという傾向です。そして次のグループは、ingolata(呑み込んだ)と言いますが、喉が固く、声を「作ってしまう」タイプです。3番目のグループは、声の深さが欲しいために喉をいきなり下げて、喉頭だけで深さを作るので、高音に行きにくくなる傾向です。どの場合も総じて音程の悪い方が非常に多かった。音程が悪いという事は、耳が悪くない限りは、発声技術が原因ですね。これから受験に向けて、発声法の改善が大切ではないかと思います。

そしてもう一つ大きな点です。イタリア語やドイツ語の語学の勉強をしていない高校生の段階では無理もないのですが、内容をもうちょっと把握して歌わないと、なんというか、「虚しい歌」、声は良いのに全く内容のない歌が目立ちました。今は僕らの時代と違って逐語訳などが、曲集の後ろの方にきちんと出ていますので、ちゃんと訳詞を読み込んで頂きたい。オペラのアリアを歌うにしても、アリア一曲だけ勉強しても仕様がな。その曲が歌われるシチュエーション、オペラ全曲の中のどういう位置で、どういう内容で歌われるのかということを勘案して歌えばやはり違いますので、これから受験に向けてしっかりと、勉強の仕方について、今一緒に勉強されている先生と真摯に向き合って頂きたいと思います。しかしまずは発声を見直し、音程の悪い方はしっかりと是正するように。受験用の自由曲は、絶対に、大曲を歌う必要はないんです。いまの御自分の実力100%歌える曲を用意するべきだと僕は思います。大曲を歌って失敗したら、そこで終わりですからね。しっかり勉強してください。

(07)高校1/2年生部門

素材として良い声質をもっている人が多く、聞いていて嬉しかった。しかし選曲によって、まだ技術的に欠陥がある。当然ですね、歌を始めて時間がたっていないのだから。発声の技術的なものが出来上がっていないところに、ちょっと大きめの歌に意欲的に取り組んで歌い、破綻をきたす。音程が下がったり、イタリア語など言葉の発音がきちんと出来ていなかったり、という欠点が散見されました。ただ素材としてはとても楽しみなもので、2年生の方は来年3年/卒業生部門があるので、受験を控えてぜひ挑戦してください。音楽家になるのは大変だが、好きな音楽を自分の将来の仕事として選んでいって下さることを、切に願っています。

(08) ミュージカル小学生部門

今日は専門の先生がいしゃるので後で詳しく総評を頂きます。その前に私から少しだけ、審査委員長としてお話しいたします。毎年感心するのですが、ミュージカルの皆さんは本当に好きで、この歌をこう表現したいということがよくわかり、一生懸命よく勉強されて、舞台の上でパフォーマンスされているので、聞いていて心地良いです。この部門は毎年参加される方が増えているので長丁場なんですけど、疲れを忘れて審査員として楽しませて頂いています。本当にお疲れ様でした。

■西日本准本選担当副委員長：楓八州子先生

お疲れ様でした。本当に大変な努力が、今日ここに立つまでにあったかと思います。皆さんに対して、ここから拍手をおくります。お疲れ様でした。昨年もこの段に立たせて頂きましたが、一年一年、レベルアップすることに大変びっくりしています。御一人御一人のクオリティが上がっていることを嬉しく思っています。

去年も申し上げましたが、基礎を大切にすること。

楽譜を読める方、いますか？小学校の方、手をあげてください。どうでしょう、読めない方は？あげられませんか

（笑）。ぜひ楽譜をちゃんと読めるようになって下さい。そして、英語の方はいいのですが日本語の方は、洋楽の中に日本語を当てはめるという作業があります。そのときフレーズがつぶれるとか、日本語が入っていないとか、いろいろな問題がおこりますが、そのことと向きあってほしい。それから、今日はほとんどの方が「世界を見られていた」と思うのですが、「主役の本人が歌っているときに見えている世界」を、歌って頂きたいと思います。客席から見ると主役ではなく、主役が見ている世界を想像して表現に充てて頂きたいと思いました。皆さんとても素晴らしくて、甲乙つけがたく、来年はどうなるのかなと思いますが、またたくさん勉強を積んで、そしてお父様にもお母様にも感謝して、チャレンジして頂きたいと思います。今日はお疲れ様でした。

(09) ミュージカル中学生部門

■東日本准本選担当副委員長：信太美奈先生

中学生部門の総評です。このコンクール、毎年聞かせて頂いておりますが、去年小学生だった方が中学生になるなど、著しい成長を見ることが本当に楽しみで、去年こんな感じだった子が今年はこうなったなあ、なんて思いながら評価いたしました。今日思ったこと。中学生なのに、大人の部門に年齢隠してでもわからないなあ、と思いながらプログラムみると中学何年生なんだなあと思っていました。

でも、小学生で子供の声だった人が中学生になって段々大人の声が変わっていくところです。男の子のようにはっきり声変わりということでも変わらなくても、女の子もだんだん大人の声になっていく。その過程は教える側にとっても本当に難しく、ひとりひとりに合わせた方法で工夫しながらレッスンするのですが、上手に移行できているか、それとも、私は大学などで教えているのですが、小学生の時のままの「勢い」で歌ってきてしまった人も、大人になってもいるのです。このコンクールに出ている方は、私たちからこのように、基礎が大切だよとか、それから大人の声になっていく過程を大事にしてねとか、適切なレッスンを受けるようにしてくださいというようなアドバイスをしているので、皆さんが大人になっても、小学生のような子供の声で歌うようには、ならないで欲しいなあと思っています。小学生は本当に元気で可愛らしくて、地声のまま高いところまでピーツと出たりするのですが、そのまま大人になると、それは大人っぽい歌い方ではないので、要注意です。ですから的確なレッスンをうけて成長していった欲しいと思っています。

まだ中学生のなかでも幼い声だと思う子もいたし、上手に移行中だなと思う子もいました。お母様お父様への御願いなのですが、子供たちは大人に言われたことを100%そうだと思ってしまうので、子供たちが、どの先生がつくか、どういう方がアドバイスしてくれるか、ということ（を考えて欲しい）。正しい成長を見てくださる先生について欲しいなあと思います。私は自分の娘にもバレエをさせたりしておりますので、本当に先生によって違うなあという事を実感しています。ですからお父様お母様たちがお子さんについて、今上手だからといって褒め称えてくれるだけの先生ではなく、ちゃんと評価して、【育てて】くださる先生を選んでいただきたいと、【本・当・に！】思います（審査員席から笑い声）。いやいや、先生（審査員）たちは本当にそう思っているんですよ！

そういう面でもこのコンクールにでて、しっかり周りをみて、お友達になったりもするかもしれないし、その子が次の年にどういう成長しているかなあなどと切磋琢磨しあえる関係になって、情報交換もできるかもしれませんし、そんなふうにしてミュージカルの世界で、本当に素敵な声で歌うひとが増えていったらいいなあとは私は思っています。きょうは皆さんの素敵な歌を聞かせていただき、それからパフォーマンスも、ありがとうございました。楽しませて頂きました。これから、厳しい評価が……。嬉しい人も残念だった人もいると思いますが、でもそれも、残念だなあと思うひとは来年までちゃんと努力をすれば、そして努力の結果がでるものが、歌だと、私は思っていますので、しっかりやってください！ありがとうございました。

(10)声楽愛好者 Y 部門

(11)声楽愛好者 A 部門

コロナ禍三年目になって、マスクを外して思う存分声が出せない時間が続いています。なかなか練習場所が難しいのではないかと思います。そのせいかどうか、とくにY部門の方たちが、ちょっと声に元気がなかった。もっとしっかり、体を使って声をだしてくれると良かったなあと思いました。A部門やオメガなどの熱演にくらべると、ちょっと少なかったかな。

YもAも、技術的な問題もあるとおもうのですが、音程の悪い方、言葉がおろそかになっている方が多いかなと思いました。歌をきくと、クラシック音楽がすきなのだろうかということがひしひしと伝わってきます。我々以上に音楽好きなのではないかということを感じます。もっともっと音楽のフォルム、形をきちっと歌えたらいいのではないかと思います。小学校の時に皆さん勉強したと思いますが、音楽の三要素って覚えていますか？リズム、メロディー、ハーモニー。音程が悪いとハーモニーは崩れてしまう。メロディもリズムも、悪いと音楽の三要素は崩れてしまうのです。だからとくにrecitativoなどで、音程や言葉のリズムがくずれてしまうと音楽の形を崩してしまう。そういうところを勉強してほしいとおもいます。

それから重要な事ですが、コンクールの要項に規約が書かれていますが、皆さん読んでいますか？オペラの楽譜には、この役がソプラノなのかメゾソプラノなのか、書いてありますね。その通りに歌ってくれなければ減点になってしまいます。それから、申告した「どこからどこまでアリアを歌う」というところは全部歌わないと、減点の対象になってしまいます。今日はYに一人、Aに一人、規約違反の方がいましたので、残念ながら5%減になりました。来年からよく募集要項を読んで申告していただきたいと思います。

(12)声楽愛好者 B 女声部門

やはり本選に残ってくる方は、しっかりした声をお持ちで、しっかりした歌を歌っておられました。今日は熱演賞がいっぱいあります。毎年、愛好者部門を聞かせて頂く、Bもオメガも、YもAも皆さん、歌が好きだ、という事が前面にでているのですね。これは一番大切で、一番大元だとおもいます。この歌を歌いたいという、執念にも似たものですね。でもね、思う一念岩をも通すという、しっかり毎日訓練することが大切です。今日入賞されたかた、まあ一位の方は来年もう受けないのでしょうか、2位までの方はまた来年、あとで批評会がありますので、よく足りなかったことを先生方にお聞きして、お持ち帰りになって準備して頂ければと思います。

(13)声楽愛好者 B 男声部門

毎年思うのですが、愛好者部門は本当に歌が好きなんだという熱を感じます。きょうも熱演賞がいっぱいあります。とにかくまず、好きである。歌いたいという熱意が体を動かして、声がでようになると思う。何回もでていらっしゃる方も多く、聞きたびに良い声になっていき、継続は力なりなのだなと感じます。これからも頑張って、心肺機能をしっかり使うと健康にも宜しいそうですから。まだこの先にもオメガ部門もありますので、とにかく行くところまで行きましょう！お疲れ様でした。

(14)声楽愛好者オメガ部門

本当に皆さん、歌を愛していられることが良く伝わってきました。これから気を付けて頂きたいことは、私もあと2年ほどで皆さんの御同輩になるわけですが、年をとってくると呼吸が浅くなってしまうのですよ。今日お歌いになっている姿をみるとやはり、呼吸の浅いかたが多かった。そうすると喉が上がって音程が悪くなったりしますので、アンチエイジングのためにも、普段からしっかりと呼吸を深くとる。呼吸法の練習を、毎日しっかりやって欲しいと思います。

私がイタリアで勉強していたときに、ピエロ・カップッチリという有名なバリトン、もう亡くなってしまいましたが、この先生に歌を見ていただいたときに「お前は発声法を何年間やったのか？」と聞かれました。「発声だけですか？」「そうだ」「日本にはそういう習慣がなくて、発声を1時間くらいやったら歌のレッスンに入るのです」。それではだめなんだ、とおっしゃって、自分は歌をやるときめたときは毎日3年間3時間発声練習だけをやった、それをやらないと横隔膜が鍛えられない、きたえられてはじめて本当の声がでるのだといわれました。嫌味なくらい自信たっぷりな方で、同僚のバリトンを聞きに行って「あいつの声は俺の足元に落っこっていたよ」などと平気で言う人でした。でも惜しい人でしたね。10年以上前ですか、交通事故で。自分で運転していたオープンカーが穴に突っ込んで投げだされてしまって、首をやられて。長い間入院していましたがお亡くなりになりました。

でも、おっしゃっていることは絶対だと思うのですね。心肺機能を鍛えるという事が、年を取ればとるほど必要になってきますので、ぜひ、今おつきになっている先生と一緒に、呼吸法の勉強をこれから毎日、しっかりやっていただきたいと思います。

(15)重唱部門

楽しんで重唱を演奏していることは良くわかるのですが、やはり個人個人の発声技術が向上すると良いかな。ソロになったとき音程が定まらなかったり、高音がうまく抜けていかなかったり。二人三人になると強気になって合わせることはできるのだが、一人で歌ってもしっかりと歌える技術を身に付けて頂きたい。

(16)高校生アンサンブル部門

二人三人になると強気になって合わせることはできるのだが、一人で歌ってもしっかりと歌える技術を身に付けて頂きたい。重唱部門で申し上げたことが、この部門にもいえます。各合唱団とも、ソプラノの響きが止まってしまい、うまく頭声の方に抜けていかない。そうすると音程が下がってしまったりする。発声技術の向上を目指してもう一つ、頑張ってください。